

あーかす

米子医療センターマガジン #19
January 2018 (平成30年1月号)

巻頭言 新年のごあいさつ

勝たんと打つべからず、
負けじと打つべきなり!

厚生労働大臣
感謝状が授与
されました

特集

がん医療講演会

態度に示して生きましょう!

「インフォームド・コンセント」と
「エンディング・ノート」を考える

米子医療センター活動報告

平成 29 年度西部医師会・
米子医療センター連絡協議会

New Face

レシピエント移植コーディネーターとしての
今後の活動

『米子医療連携センター』 2月オープンに向けて
第 71 回国立病院総合医学会に参加して

色のレシピ vol.10
Enjoy! 学生LIFE



厚生労働大臣感謝状が授与されました

平成29年11月6日、応接室で鳥取県福祉保険部長の藤井 秀樹様から当院の濱副 隆一院長に、厚生労働大臣感謝状が授与されました。これは移植対策の推進に顕著な功績のあった者に対して、厚生労働大臣がその功労をたたえ、労苦に報いるとともに、移植医療対策の推進に寄与することを目的としたものです。

■ contents ■

03 巻頭言 新年のごあいさつ

勝たんと打つべからず、負けじと打つべきなり!

04 特集 がん医療講演会

態度に示して生きましょう!

「インフォームド・コンセント」と「エンディング・ノート」を考える

06 米子医療センター活動報告

07 平成 29 年度西部医師会・米子医療センター連絡協議会

08 New Face

09 レシピエント移植コーディネーターとしての今後の活動

09 色のレシピ vol.10

10 『米子医療連携センター』2月オープンに向けて

11 第71回国立病院総合医学学会に参加して

12 Enjoy! 学生 LIFE

14 お知らせ



患者さまと職員が向き合った姿で、患者さま中心の医療提供とYONAGO(米子)の「Y」、MEDICAL(医療)の「M」、CENTER(センター)の「C」の文字を、まごころ、信頼、安心、良質の医療をイメージする「ハート」に組み合わせ「米子医療センター」の明るく元気な姿を表しています。

あーかす

あーかす(Arcus)とはラテン語で「虹」を意味し、英語のArc(弓、橋)+Us(私たち)で「私たちが地域の架け橋になる」という意志を込めてタイトルとしました。私たちの持ついろいろな表情を、地域の方々や医療関係者に広く知って頂き、絆を更に深める情報を掲載してまいります。

勝たんと打つべからず、負けじと打つべきなり!

昨年は、第45代米国大統領にドナルド・トランプ氏が就任し、世界の多くの国が自国第1主義に傾いてきた感があります。そういう中で、北朝鮮は、度重なる弾道ミサイルや大陸間弾道ミサイルを発射し、近隣諸国への威嚇行為をエスカレートさせ、9月には6回目となる核実験を強行しました。2018年の今年は、明治元年(1868年)から起算して満150年の節目に当たります。歴史観のひとつに「70年周期説」という見方がありますが、日本の歴史を振り返ってみると、およそ70年程度のサイクルで大きな「社会変動」や「価値観の破壊」が起きています。最近では、明治維新から70数年で第2次世界大戦が勃発していますし、それから70数年を経た今年が果たしてターニングポイントの年になるのか、危機を感じるこの頃です。

医療の分野においても、少子高齢化の進む中、イノベーションへの期待と制度の持続可能性のはざま、適切なインセンティブ構造を作り上げるべく、さまざまな政策が進められようとしています。その中のひとつに、団塊の世代が75才以上になる2025年を見据えた医療と介護の制度設計が挙げられますが、2025年はあくまで課題対応の出発点であり、団塊の世代の大半が人生を

卒業する2040年ごろまで続くことになります。すなわち2025年までは、若い世代の急性期医療のニーズが減少し、高齢者の医療と介護への対応が迫られますが、その先には、支え手の世代が細る人口減少社会が待っています。米子医療センターは、これまで右肩上がりの実績で地域の医療を支えてきましたが、医療ニーズの減少が見込まれる中にあるのは、「勝たんと打つべからず、負けじと打つべきなり」(徒然草 110段)の姿勢で、地域の医療をしっかりと守っていきたいと思います。

最後に、今月末に病院の東側に3階建ての「米子医療連携センター」が完成します。1階には医療講演会のできる「くずもホール」(200人収容)、2階にはがん患者さんの在宅療養を支援する「地域ケア推進室(地域医療連携室)」、職員仮眠室、3階には研修医や学生の控え室、スキルアップ・ラボなどを整えました。2月4日午後に完成記念講演会「認知症の時代をどう生きるか! ~その予防、治療、サポートまで~」(招聘講師: 武田雅俊先生; 大阪大学名誉教授、日本精神神経学会 理事長、世界老年精神医学会 理事長)を「くずもホール」で予定しています。多数の皆さんにご参加いただければと存じます。

新年明けまして、おめでとうございます。
今年も無病息災で、幸多き一年になりますよう
お祈り致します。

がん医療講演会

態度に示して生きましょう!
「インフォームド・コンセント」と
「エンディング・ノート」を考える

特別講演 早稲田大学人間科学部 名誉教授
木村 利人先生

りひと



2017年11月25日、米子コンベンションセンター、小ホールに180名の参加者を迎えて「がん医療講演会」を開催しました(図1)。早稲田大学人間科学部名誉教授で、生命倫理学(バイオエシックス)の創始者である木村利人先生をお招きして、「態度に示して生きましょう!『インフォームド・コンセント』と『エンディング・ノート』を考える」と題して特別講演を拝聴いたしました。木村先生は、日本国民はよく知っている、坂本九が歌ってヒットした「幸せなら手をたたこう」の作詞者でもあり、講演のタイトルは「♪ 幸せなら態度でしめそうよ、ほろみんなで手をたたこう♪」という歌詞の一節から採択されたものです。



副院長 杉谷 篤

イントロ講演

一般の人にとっては「インフォームド・コンセント」とか「エンディング・ノート」という言葉は難解でもあるので、杉谷が「終末期医療と当院の緩和ケア」と題して15分間のイントロ講演をしました。日本人の死と終末期医療の現状、その根底にある死生観を概説しました。終末期医療のなかでも、特にがん末期の患者さんを対象とする緩和ケア、当院の緩和ケア病棟を紹介(図2)、余命告知を受けた患者さん



図2

が経験する全人的苦痛、なかでも霊的苦痛(スピリチュアル・ペイン)(図3)を理解していただけるように解説しました。私たちもバイオエシックスに登場する新しい言葉に戸惑うことがあるので、主な言葉を紹介しました(図4)。



図3

- 終末期医療で登場する言葉**
- バイオエシックス(生命倫理学)
 - インフォームド・コンセント(納得の上の同意)
 - エンディング・ノート(終活ノート)
 - ターミナルケア(終末期医療)
 - ホスピス(ターミナルケアする施設)
 - リビング・ウィル(生前の意思、遺言)
 - グリーフケア(悲嘆ケア)

図4

心の準備

木村先生は、がんの終末期を迎える患者さんが、どのような死生観を持ち、心の準備をしたらよいか、家族や周囲の人に対する思いをどのような形に遺しておけばよいかを示唆してくださいました。はじめのお話は、1972年に肺癌で亡くなった父上のことでした。海外で教鞭を執っていたとき、叔父から「お父さんが亡くなったよ」という連絡が有り驚きます。結核と聞いていたのに肺癌であったと聞いてショックを受けました。当時は、がんは不治の病であるから、医師は、本人はもとより妻や子供にも真の病名と余命を伝えず、叔父のみに伝えていたのです。治療法の選択も残された時間の過ごし方も考える機会がありませんでした。その後、今言う「エンディング・ノート」を見つけます。「苦しくても処置無し。退院を希望しても、

せっかく治療しているのにと一治療どころかさじを投げているとしか思えない」死に直面しつつある命の主権者は自分なのだということを切々と訴えているように思えました。

それと対照的な出来事が、ハーバード大学にいたときの腎臓結石の入院経験です。患者さんの権利を尊重する米国の医師は、「手術を薦めるが、すべての情報を提供します。最終的に決定するのはあなたです」と伝えます。患者さんが主体と考え、「情報公開」「知る権利」を尊重するのが「インフォームド・コンセント」だと体験しました。

また、サイゴン大学に赴任中、命の問題を深く考える機会に直面します。当時、海老や魚を美味しいと食べていたのですが、ベトナム戦争で使用された枯れ葉剤の中に含まれていた化学物質が遺伝子に影響を与え、現地人や米軍帰還兵の子供に奇形が生じることを知るのでした。人間の命の破壊と尊厳の否定に直面して、新しい命の学問を創る使命があると感じます。それが、「バイオエシックス（生命倫理学）」の構想でした。

義理の母上が69歳で亡くなったとき、「エンディング・ノート」のような内容が記してあったノートがありました。死んだらこうしてほしいという本人の生前意思が記してあって、それに沿った告別式ができたのでした。これは法律的な遺書ではなく、医療関係者に自分の希望を伝えておくものと解釈できます。良く生きて、良く逝く、充実した実りある人生を全うするために、いつかは必ず訪れるエンドオブライフに向けて、あらかじめ備え、家族とともによく話し合った上で、自分自身の考えを「態度に示して」明確に文書にしておくことはとても大事ですと言われました。

最後に

最後に、学生時代に作詞された「幸せなら手をたたこう」という歌に込められた思いを語られました。作詞されたきっかけは、1959年にフィリピンで開催されたYMCA国際ワーキングキャンプへの参加でした(図5)。かつての日本軍が戦争で



破壊しつくしたフィリピンの地で、厳しい労働奉仕活動をするうちに、日本の一青年の努力を認めて地元の人が心を開いてくれ、聖書の祈りの一節が心に浮かびます。フィリピンから帰国の船上で、耳に残る地元フォークソングのメロディーに合わせて、神のお導きに感謝しながら「幸せなら手をたたこう」の歌詞が誕生するのでした。早稲田関係を中心にして人々が口ずさむ歌が、いずみたくの作曲と坂本九の歌唱、そして1964年の東京オリンピックと重なって世界中に広まることになったのです。知ること、愛すること、輪を作ること、そして世界に目を向けること。「し・あ・わ・せ」を態度に示しましょう。豊かな「いのち」を育み、「平和」を求め「態度に示して」生きることが「バイオエシックス」的な生き方であると結ばれました。

木村先生は、資料を入れた鞆を持って壇上にあがり(図6A)、フロアの聴衆にわかりやすく語りかけ(図6B)、皆さんも熱心に傾聴しています(図6C)。質問時間には、笑顔を絶やさず、フロアに下りて皆さんに声をかけながら歩いて行かれます(図6D)。聴衆から「人間科学部とは何を研究、学ぶところですか?」という質問がありました。木村先生は、「その昔、早稲田大学は医学部を創りたかったが、諸事情で断念せざるを得なかった。時の医師会長が、病気になった人を対象にするのが医学部だが、どうして病気になるかを研究するところが必要だ」と諭され、早稲田大学は人間科学部を創設することに



なると答えられました。「どんな質問でもいいですよ」という木村先生の言葉に、「先生は、どこにお住まいですか?」という看護学生の質問がありました。木村先生は東京の世田谷区だとお答えになりましたが、私は、「アメリカ、ベトナム、フィリピンなど世界中の話が登場したので、この先生はいったい、どこにお住まいなのだろう?」というのが、あの学生の素朴な疑問ではないかと感じました。

木村利人先生の「リヒト」というのはドイツ語で「光」という意味です。この特別講演は、先生自身のご家族の死を巡る個人的な思いを込めて問題提起され、がん末期の緩和ケアのような終末期を迎えるときの心構えにスポットライトをあててくださった素晴らしい講演でした。



米子医療センター活動報告

第34回米子医療センター市民公開講座



関節リウマチって どんな病気?



リハビリテーション科医長
吉川 尚秀

去る平成29年10月28日に第34回市民公開講座が米子医療センター内で行われました。当日は台風22号が迫りあいにくの天気でしたが、多くの方に参加を頂きました。この場をお借りして深謝いたします。今回は『関節リウマチってどんな病気?』というタイトルで、関節リウマチの病態と診断を主な内容として講演しました。

以前、関節リウマチは『慢性関節リウマチ』と言われていました。慢性に経過する病気、治らない病気、いずれは関節破壊が生じ寝たきりとなる、場合により手術を必要とする病気と考えられてきました。この『慢性』が患者さんに不安を与え精神的ダメージがあることなどにより、日本リウマチ学会は2002年に『慢性』を取って『関節リウマチ』と名称を変更しました。

関節リウマチは約10年前より新しい治療法である生物学的製剤が導入され、またその診断方法についても大きく変化しています。

慢性に経過すると思われていた関節の破壊は実は関節リウマチを発症後2年で最も進行することがわかってきました。そこで早期診断、早期治療の必要性が言われて久しくなっています。以前とは異なり、早期に診断し早期に適切な治療を開始することで関節リウマチは良くなる病気となっています。

診断のツールとして関節エコーも広く普及しています。また血清抗シトルリンペプチド抗体が実臨床で使用されています。これは早期診断に有用なばかりか、将来的に関節リウマチを発症する可能性を予測できる優れたものです。

『免疫』の話となると医療従事者でも毛嫌いし、ある種のアレルギー反応を起こす人もいます。そんな中、来院された方々はやや難しい内容であったにも拘わらず熱心に傾聴され、最後の質疑応答の際には最新の情報についての質問もありました。今回公開講座に参加頂いた方々の熱意を私の刺激とし、今後の診療に励む所存です。

関節リウマチの 日常生活について



6階病棟 看護師
築地原理恵

10月28日(土)に、当院外来ホールにおいて、市民公開講座を開催しました。当日は雨が降って肌寒い天気だったのですが、およそ30名の方の参加がありました。

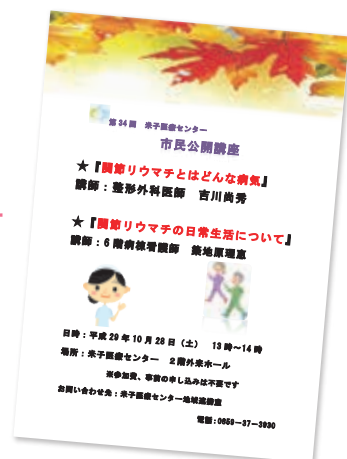
今回は6階(整形外科)病棟が担当し、「関節リウマチ」をテーマに行いました。吉川尚秀先生より「関節リウマチとはどんな病気」と題し、関節リウマチの症状や診断、治療などについてわかりやすく、講義をしていただき、私は看護師の立場で関節リウマチの日常生活について話をさせていただきました。

関節リウマチは、長く付き合っていかなければならない病気です。よい状態を維持するためには、適切な治療を続けながら、体調管理を含めた日常生活の工夫をすることが大切です。関節リウマチの症状はよくなったかと思うと、また少し悪くなったりと変化することがあります。そうした変化には、身心のストレスや生活習慣、関節へ負担なども影響を及ぼしているといわれています。ですから、日常生活のポイントとして、①適度な安静と運動(関節拘縮、筋力低下予防のための運動、関節を保護し負担をかけない動作の工夫)②規則正しい生活(休息・睡眠はしっかりとる、ストレスをためない、感染症予防、冷え・湿気対策)③栄養バランスのよい食事(筋力保持のために良質なタンパク質の摂取、貧血予防のため鉄分の摂取、骨粗鬆症予防のためカルシウムの摂取、合わせて鉄分や、カルシウムの吸収を助けるためのビタミン類の摂取も必要)この3点に留意することで、症状の改善を促すことができます。

また、生活動作の工夫だけではなく、生活環境を工夫することも患者・家族にとって大きな問題です。患者調査の結果でも「浴槽につかる」「トイレでの動作」「キッチンでの作業」等々、日常生活のいろいろな動作に困られていることがわかっています。廊下や階段に手すりを設置したり、洋式トイレへの変更、段差の解消や滑りにくい床への変更、ドアノブをレバー式に変更など、日常生活が楽にできるような住まいづくりも大切です。

参加された方の中には、自身の症状についての質問や薬物療法についての質問もあり、関節リウマチに対する関心の高さがうかがえました。講座終了後には「参考になった」「わかりやすかった」と感想をいただきました。

これからますます寒くなり、つらい季節となりますが、今回の講座を通して、体調管理、生活の工夫を行いながら少しでも症状の改善に役立つことができれば幸いです。そして、生活の質の向上につながることを願っています。



平成 29 年度西部医師会・ 米子医療センター 連絡協議会



統括診療部長
南崎 剛

2度目のJアラートが北海道、東北を中心に流され物騒で落ち着かない中、また、週末には大型の台風18号の接近に伴う大雨の警戒が必要となりました9月15日(金)に、全日空ホテルで恒例の西部医師会との連絡協議会を開催しました。司会は例年のごとく私が司会・進行致しました。今年も103名の出席(西部医師会53名、大学5名、当院45名)を賜り大変感謝申し上げます。野坂美仁西部医師会会長には挨拶で、季節外れのインフルエンザへの注意喚起と医師会会員自らの検診受診への必要性について話されました。濱副隆一院長の挨拶では、米子医療センターは現在、診療部の常勤医師が35名で、team oncologyの推進としてがん関連領域の認定看護師の育成に力を入れていること、また、今後、第3期中期目標としての外来を専門化して入院を中心とした診療を行うこと、在宅医療機関と連携を図り地域医療ネットワークの構築を図ること、需要に応じた病院機能の選択を図ることや人材育成と教育機能の強化を図っていることを報告され、平成30年1月に完成する米子医療連携センター完成図を紹介されました。

議事では、杉谷篤副病院長が本年4月1日から当院が導入した時間外選定療養費について報告いたしました。夜間・休日のコンビニ受診が多い現状を踏まえ勤務医の疲弊を軽減する目的で導入した経緯や、9月までの効果について昨年の同時期と比較し検証いたしました。当院の時間外選定療養費の未算定基準は4月の導入時は

1. 受診後に入院となった場合
2. 紹介状を持参された場合
3. 医師判断(医師の指示や緊急性と判断)でしたが、急患診療所の小児科医療に対する不安への配慮から9月1日より
4. 小学生未満の方を基準に追加して施行しています。

時間外選定療養費の5か月の間の算定件数は月約180件、算定率は月約40%で、時間外受診患者数(小児科と成人対象科いずれも)は前年より減少しており、コンビニ受診抑制の効果はあったものと思われます。今回の導入に最も期待していました深夜帯における成人対象科の時間外患者数は4、5、6月に前年より減少したものの、7月からは一転増加に転じています。この理由は重症や二次医療の必要な患者の増加であると現状では考えています。今後も当院は二次救急を担う病院としての役割を果たすべく、入院治療が必要な患者さんに対する適正な医療を目指しますと締めくくられました。日本医師会勤務医部会でも、ここ西部医師会勤務医部会でも医師の過労に関しては長年検討されている重要テーマですが、各病院間での温度差があり根本的な解決方法は見いだせないままです。当院としても当直明けの休みが取れない現状では、少しでも医師の負担を減らす意味でこうしたコンビニ受診対策は必要不可欠と考えています。

懇親会は、阿部博章西部医師会理事より西部医師会の連絡協議会新参加者の紹介と大学医師、スタッフの紹介があり、当院からも新任医師と新スタッフの紹介を行い、高見徹西部医師会副会長の乾杯で宴を開始しました。今回は、濱副院長の懇親の席を長く持ちたいとの宣言通り乾杯の時間まで45分とほぼ設定どおりに進行し、その後の意見交換の時間が十分確保できたのではないかと安堵しています。最後に杉谷篤副院長による1本締めで終宴となりました。

お忙しい中ご出席いただきました皆様には心より感謝申し上げます。



◀野坂美仁会長(上)
阿部博章氏(下)

懇親会の様子▶
(右)(下)





消化器内科医長 原田 賢一

地域のお役に立ちたい

この度、米子医療センター消化器内科医として勤務させて頂くことになりました原田賢一（はらだ けんいち）と申します。

島根県松江市に生まれ、平成5年に鳥取大学医学部を卒業し、鳥取大学第二内科に入局致しました。大学院修了後、平成11年4月から1年間、前身である国立米子病院に勤務した経歴があります。平成15年より、この度、当院に赴任するまで約14年半、鳥取大学第二内科で消化器内科医として勤務し、超音波内視鏡等を用いて、主に胆膵領域を中心とした診療を微力ながら行って参りました。大学勤務の間には、米子市内はもちろん近隣の先生方をはじめ、関係する皆さまには大変お世話になり、この誌面を借り、感謝申し上げます。

消化器内科は、内視鏡を用いた診断はもとより、近年は消化管（食道・胃・大腸）癌の内視鏡的切除を始めとする治療、胆道や膵疾患の治療など、外科にも似た診療を行うことが多くなっております。また、手術が難しい方には化学療法などを含めて、患者様の状態に応じた治療も行います。どの領域も同じですが、我々のみで診療を行うのではなく、消化器外科医、放射線科医、病理医と協同して診療にあたり、またその他の領域の医師、そして看護師の方々をはじめとする多職種の皆さんと協力して患者様に向き合っ参ります。大学での診療は専門性に偏っていましたが、当院では専門性のある程度保持しつつも幅の広い形でよい医療を患者様に提供し、地域のお役に立つことができれば本望と考えております。

最後に、アラフィフにして新天地での勤務で、まだまだ慣れません、何卒宜しくお願い申し上げます。



血液・腫瘍内科医師 持田 浩志

一生懸命頑張ります

血液・腫瘍内科の持田浩志（もちだ ひろし）と申します。出身は島根県松江市宍道町です。

高校は松江北高校、大学は鳥取大学出身です。平成26年より2年間、米子医療センターで初期研修医としてお世話になりました。平成28年4月から島根大学医学部附属病院腫瘍・血液内科で勉強させていただき、平成29年12月からまた、米子医療センターに戻ってこさせていだきました。血液内科医として、骨髄移植をはじめとして、さまざまなことを但馬先生、足立先生の下で学ばせていただきたいと思います。

まだまだ未熟者ですが、馴染み深いこの病院で一生懸命頑張りたいと存じますので、よろしくお願い致します。



レシピエント移植コーディネーターとしての今後の活動

この度2017年8月、レシピエント移植コーディネーターの試験に合格することが出来ました。この制度は日本移植学会が認定する制度で、今年で7回目の試験となります。

現在私は5階病棟に勤務していますが、外科病棟に配属になってから何例か移植の看護に携わってきました。もともと外科が好きで移植の患者さんに関わるなかで移植医療に興味をもったこと、資格を取得して専門性を身に付けたいと思ったことが受験をしたきっかけでした。

当院は、鳥取県唯一の献腎移植施設であり、昨年は当院で初めてとなる2例同時の献腎移植を行いました。生体腎移植においては月に約1件のペースで行われており、消化器外科医と泌尿器科医との連携により血液型不適合などリスクの高い移植も行っています。

一般的な外科手術は患者さんのみの手術になりますが、移植においてはドナーとレシピエントという2名の患者さんの手術となります。特に生体腎移植において、ドナーは健康な体であり、その元気な体にメスをいれるということになります。ドナーには家族、身内を助けたいという思いがあり、そこには様々な家族背景や事情があります。

先日外来へ行く機会があり、先輩のレシピエントコーディネーターと術前の患者さんの情報共有を行いました。その時、患者さんの家族背景など広い視野をもって全体像をみていくことの大切さを改めて感じました。病棟では様々な診療科の患者さんが入院されており移植を受ける患者さんとの関わりが限られてしまい、短時間で患者さんの全体像を理解することは困難だと感じました。しかし、外来で得た家族背景などの情報を病棟で共有し、退院指導などの看護に繋げていけるよう病棟スタッフへ伝達していくことが自分の役割であると感じています。



5階病棟
副看護師長
齋藤 まい

レシピエントコーディネーターとなり、資格を持ち病棟で勤務していることを強みにし、移植医療に貢献していきたいと思っています。

米子医療センターの1階から8階までのホスピタルアートを描いていただいた稲田さんのコラム。

色のレシピ Vol.10

【空色・水色】

ほとんどの方がレシピと言えば料理の調理法だと思うかもしれませんが、もう少し深めると“物事の秘訣”という意味に辿りつきます。色にも多くのレシピがあります。日々の暮らしに役立つシンプルレシピをご紹介します。



色彩プロデューサー 稲田 恵子

椅子づくり職人の父親が、盲目の娘にたった一つの色を教えるのなら空色である、という色がメインテーマの童話“空色のゆりいす”。父親は静かだったが無限の愛と幸福を願って一つの色に託したのだと思います。

色は的を得た時、言葉以上の力を発揮し、心深くしみわたることがあります。宇宙飛行士が“地球は青かった”という通り、私たちは濃淡はあるにせよ青い色に守られて生きています。

もちろんそれを意識する、しないは別として、体内のどこかにその影響は流れ

込んでいると思っています。

青系統の色は、否定的な意見はほとんどなく、世界の人々の75%に支持されている驚愕の色と言えます。

色に迷ったり、決めかねたりした時は、とりあえず青系統のどれかでまとめておけば大きな間違いはないだろうと思います。しかし、その時のアクセントカラーが、あなたのセンスを試すときになるでしょう。

空色より水気の多い水色は、KIND（親切）を表す色で、ひと昔前の金融関係のロゴや看板などは、この水色が多く使われており、あなたの大切なお金

を親切、丁寧に扱わせていただきますという役割を、視覚の情報として展開していました。

水色の青は微粒子による散乱現象や水中に含まれている微生物などが加わって美しい水の色に見える。空色の青は、人工的な汚染大気を押し上げ曇らせてしまえば明るい青として存在しないことになる。そう考えると、空色も水色も環境保全につながる重要な色名だと思っています。



外観イメージ



くずもホール

『米子医療連携センター』 2月オープンに向けて

平成29年4月より着工しております『米子医療連携センター』整備工事が平成30年1月に完了し、平成30年2月より運用を開始することとなります。現在は、完成に向けて外構及び内装、器具取付けなどの仕上げ工事を実施しております。



企画課長
平 和宏

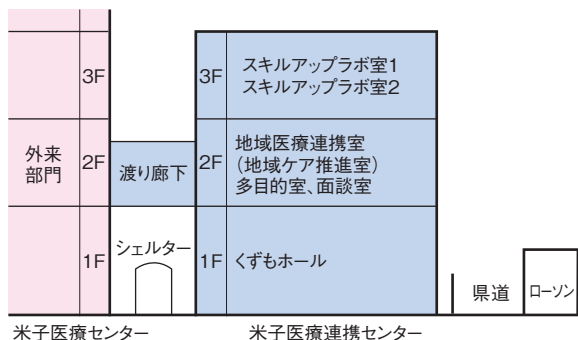
工事期間中におきましては、敷地内通路の利用制限等により患者さんをはじめ地域の皆さんと関係機関に多大なご迷惑をお掛けいたしました。本誌を借りまして皆さんのご理解とご協力に感謝申し上げます。この『米子医療連携センター』は、病院本館の東側に位置し、延べ床面積 1,239㎡ 3階建ての施設となっております。

1階は、医療従事者や地域住民を対象とした市民公開講座やフォーラム等が行える『くずもホール』を設け、200名を超える人員を収容することができます。

2階には、これまで病院本館の2階にありました地域医療連携室（地域ケア推進室）を移転させ、がん患者さんへの在宅医療などを推進していきます。その他にも面談室や多目的室などを設けております。

3階には、救命救急や病室での看護を想定した実習ができるスキルアップラボ室をメインに、研修医医局、実習生の休憩室・更衣室を設けております。

この『米子医療連携センター』の完成に伴い、これまで以上に地域に密着した医療を推進し提供していけるものと考えております。



病院正面から

整備工事完了による 進入路等の変更について

『米子医療連携センター』が平成30年2月から運用開始となることに合わせて、工事期間中閉鎖しておりました時間外入口及び通路（シェルター）が利用可能となります。

利用開始日は、**平成30年1月29日（月）午前8時30分**からとなりますのでよろしくお願いいたします。



第71回国立病院総合医学会に参加して



栄養管理室 栄養士
石川 夏実

11月10・11日に香川県高松市にて開催された国立病院総合医学会に参加させていただきました。学会では、医師や看護師、コメディカルの発表を聞くことで、栄養だけではない様々な新しい知識を学ぶことが出来ました。

私は今回、「がん治療における栄養士の役割について」と題しポスター発表を行いました。

平成28年度の診療報酬改定により、がん患者の栄養食事指導の算定が可能となりました。その影響もあり、昨年のがん患者様の栄養介入件数は一昨年と比較して増加傾向にあることが分かりました。また、がん患者さんにおける栄養指導件数、介入の多い診療科、症例などを調査した結果から、食事に対する不安がある患者さんの対応を、栄養士をはじめとする多職種で情報共有し、サポートしていくことが栄養状態の維持・改善のためには必要であると感じました。

今後も高齢化に伴うがん患者さんの増加が予測され、栄養士の介入は現在より多くなることが考えられます。今回の発表・研究で知り得た知識を活かし、がん患者さんにとって食べやすい食事へ調整できるよう、食事の相談窓口としての役割を果たして行きたいと思います。



3階病棟 看護師
福本 彩

今回私は、昨年度取り組んだ研究として、「歯科衛生士と連携し、ROAG、BDRを使用した誤嚥性肺炎患者の口腔内環境の改善」をeポスター（デジタルポスター）形式で発表しました。会場には全国からたくさんの医療従事者の方が参加しておられました。私は普段、看護師間での研究や研修内容の発表は聞く機会がありますが、医師、歯科衛生士、栄養士、リハビリなど様々な職種の視点から介入した事例や研究内容を聞いたり、資料を読む機会がありませんでした。今回学会に参加することで、違う分野の視点から見た事例や研究内容に触れることができ、自分が普段疑問に思わない事や自分が思っていたことを研究で取り組んでいる内容もあり、各職種が取り組んでいる事を活かせるように、チーム医療を行っていく必要があると思いました。また、今回の研究で取り組みは終了ではなく、研究から得られたことを基に、より良い看護が出来るよう継続していく必要があります。実践にいかしていきたいと思います。



初期臨床研修医
長尾 良太

この度 11 月 10 日、11 日の二日間にわたり開催された国立病院総合医学会に参加し、循環器疾患のケースレポートをポスターにて発表させて頂きました。学生時代に一度学会発表の機会はあったものの、研修医となつてからは初めての学会発表でしたので、数か月前から入念に準備を重ね本番に臨みました。特に今回は英語での発表であり、質疑応答も英語ということもありましたので、インターネットの英会話サービスを使って英会話の練習を繰り返し行って参りました。その甲斐あってか本番では若手医師フォーラムポスター発表部門の最優秀賞を頂くことが出来ました。

今回の発表では指導医の先生方には参考文献として英語の論文を複数提示して頂き、論文の読み進め方を指導して頂いたり、また自分でも文献へのアクセスを積極的に行いました。疾患への理解を深めるとともに苦手であった英語を克服する大変良いチャンスとなったと心より実感しております。

今年は学会は香川県で開催されたため、期間中は何度もうどんをたべる機会がありました。学会発表の醍醐味として、開催場所のプチ観光ができるという点が挙げられます。発表はもちろんですが、それ以外の点でもこの2日間は大変充実したものとなりました。



大山研修を終えて

51回生(1年生)
白根 大輝



7月18・19日の二日間、大山青年の家で宿泊研修をしました。私は、この大山研修のリーダーを担当し、6月から実際に打ち合わせに行き、研修の活動計画を立てました。この期間は、入学して慣れないうちから様々な行事もあり、とても忙しくあまり完璧な計画が組めてないように思いました。また、一日目は天候も良くなかったため、企画したカヌーやオリエンテーリングができるか不安でした。

最初のカヌーでは雨も降ることなく、楽しいスタートになりました。また、みんなが準備や片付けなども積極的で片付けも早く終わることができ、その後、昼食の準備も食事係を中心に全員で行いました。何事も全員参加するところは51回生のいいところだと感じました。午後からのオリエンテーリングでは、途中、雷や大雨が降り心配しましたが、すべて制覇して満点をとったグループもあり、みんなが一生懸命活動することができました。

夕方からの野外炊飯では、初めて薪割りをして火を起しました。薪を割ることは難しく、火力を調整することも難し

かったです。そして、自分たちで苦労して作ったカレーは、いつも作るカレーとは一味違い、とてもおいしかったです。協力して早く片付けられたことは、指導官の先生にほめて頂くことができました。

夜の肝試しでは、男子がお化けや脅かす役をして、その頑張りのおかげで盛り上がりました。なかには真っ暗な森の闇でも全然怖くないと言っている人もあり、いつもと違うクラスメートの姿が見られたのではないかと思います。

二日目は一日目とは違い、日差しが強くとても暑かったですが、昼からはみんな球技に熱心に取り組んでいました。特に鳥取チームVS島根チームで行った2球ドッジボールは、とても白熱し、本当に仲の良いクラスになったと思いました。

リーダーとして上手く引っ張ることができなかった所もありますが、クラスの目標も達成し、みんなで協力して楽しめ、お互いを知り更に仲良くなれた研修になりました。





宣誓式を終えて

51回生(1年生)
大谷 まなみ

宣誓式の準備を進めるにあたり、初めはよく分からず、戸惑うこともありましたが、自分たちでナイチンゲール誓詞について考えたり、キャンドルに込める想いなどをそれぞれ意識して、51回生らしい良い式にすることが出来て嬉しかったです。モニュメントの作成では、40ピースの裏にそれぞれの看護師像への想いを書きパズルを完成させました。このパズルは1つでも欠けると完成することができないので、40人全員で卒業まで頑張りたいと思いました。

私たちの宣誓式のテーマは「一期一会」でした。これからの行事や実習などで関わっていく多くの方々との出会いは、私たちの人生では一瞬のことかもしれません。しかし、その出会いがきっかけで自分の考えが変化したり、自分が相手に与える大きな影響もあると考え、人との出会いを大切にしたいと思います。また、これからの実習では多くの患者さんを受け持たせて頂くと思います。一人一人の患者さんのことを、疾患を含めて観察して、その方に合っ



た看護を一生懸命考えられるようにしていきたいと思います。

式典では、ナイチンゲール像からキャンドルに灯をつける時、すごく緊張しましたが、それと同時に、ナイチンゲールの目を見た時、すごく勇気を頂きました。ナイチンゲールはとても昔の人だけれども、「看護覚え書き」に書かれていることは、現在そして未来にもつながる教えだと思っています。医療技術が進歩しても、私たちが行わなければいけないことは変わらないと思うので、当たり前のことですが、基本をしっかり理解していくことが大切であると感じました。

この宣誓式を終えたということは、本格的に実習が始まるということなので、入学してから学んできたことを活かして取り組んでいこうと思いました。たくさんお祝いして下さい先輩方のように、これからも勉学に励み、分からないことがあったら質問して、問題を最後まで突き詰めて考えられるようにしていきたいです。

学校祭を終えて



50回生(2年生)
吉村 紘平

私は、学校祭実行委員として計画・立案から関わりました。今回は「革新～歴史と伝統という追い風を受けて～」というテーマを掲げ、根本的なスケジュールの変更、教務の先生方のイベントへの参加、準備の組織作りやスケジュール管理、学生への両替の依頼等、昨年までの反省を活かし新たな試みをいくつも計画し、実行していききました。様々な計画をしていく中で、目的や意味を明確にし、その目的に向かってさらに細かく計画し、実行していく力をつけることが出来ました。これは看護の場面でも必要な力であると思います。患者さんの、健康という大きな目的のために行う日々のどのケアにも意味があり、その意味を理解しないと正しく実施することが出来ないからです。小さなことでも目的や意味を考えることで、より良い看護に繋がっていくため、今回、沢山の新たな試みを行うことで、良い学びを得る事が出来ました。

いくつか反省点もありますが、学校祭を成功させることが出来たのは、各ブースのチーム力・メンバーシップ力の高さがあったからだだと思います。当日発生した問題も各々でしっかり解決に向け取り組み、2日間とも例年に無い速さで準

備・片付けを終えることが出来ました。今回発揮されたチーム力を今後も高めていき、皆で助け合いながら実習・試験・国家試験を乗り越えていきたいです。

しかし、取りかかりに時間がかかったのも事実です。追い込まれるまでは、誰かがしてくれるからと思っている人が多く、少数の人の負担が重かったように感じました。今後、早期から取りかかることが重要であったり、他人事と考えていては乗り越える事が出来ない場面もあると思います。そのことを考え、学ぶためには、本番付近でも少しトラブルがあっても良かったのかもしれない。

最後に、学術集会でのグループディスカッションや準備で各学年が混ざって行う事で、学年の風通しが良くなった他、連携する力がついたと感じました。また、教務の先生方が全員イベントに参加して頂けたことで、学生は先生方との壁が薄くなったと感じていると思います。

それにより学校全体の風通しを良くすることにつながり、より良い学びを得て、良い学校生活を送っていくことが出来ると思います。学生も先生方も日々忙しい中、学校祭の成功へ向けてご尽力下さりありがとうございました。



第35回  米子医療センター

市民公開講座

場所：米子医療センター 2階外来ホール

平成30年
1/20 (土)
13:00~14:00

●『大腸の病気と“便潜血”』

講師：消化器内科医師 樽本 亮平

●『大腸内視鏡検査って?』

講師：7 階病棟 看護師 中本 祐美



お問い合わせ先

米子医療センター地域連携室

☎0859-37-3930

※参加費、事前の申し込みは不要です

それは病気の
サインかも…

あなたの大切な大腸の
ためにおなかの中を
診てみませんか?





参加無料

市民公開講座

米子医療連携センター

完成記念講演会

日時 平成30年 **2/4** (日)
13:30~15:30

場所 米子医療連携センター
1Fくずもホール
(米子医療センター横)

特別講演

認知症の時代をどう生きるか!

~その予防、治療、サポートまで~

大阪大学名誉教授 藍野大学学長 **武田 雅俊** 先生

講演

泌尿器科における高齢者医療の諸問題について

米子医療センター 臨床研究部長 高橋 千寛



お問い合わせ先

米子医療センター
地域医療連携室
TEL.0859-37-3930
FAX.0859-37-3931

主催 / (独) 国立病院機構
米子医療センター



米子医療センターガジン

あーかす #19 アーカス

January 2018

平成26年1月10日／初刊発行
発行/米子医療センター 〒683-0006 鳥取県米子市車尾4丁目17番1号

平成26年1月5日／発行

デザイン・印刷/ 合同印刷株式会社

無料 0円

保存版

外来診療担当表

平成30年1月1日現在

切り取ってお使いいただけます

診療科	曜日	月	火	水	木	金	備考
総合診療科		山根 一和	山根 一和	酒井 浩光	松波 馨士／ 酒井 浩光	山根 一和	
消化器内科		香田 正晴	原田 賢一	松岡 宏至	香田 正晴	原田 賢一	
		樽本 亮平	樽本 亮平			松岡 宏至	
	専門外来			大山 賢治			肝臓
呼吸器内科		富田 桂公	富田 桂公	唐下 泰一	酒井 浩光	唐下 泰一	
	専門外来		交替医(肺がん外来)				
血液・腫瘍内科		但馬 史人		但馬 史人	但馬 史人	但馬 史人	完全予約制
				持田 浩志	足立 康二		
	専門外来		フォローアップ				【診療時間】13時～14時 予約制
循環器内科			福木 昌治	福木 昌治		福木 昌治	
	専門外来	ペースメーカー					【診療時間】13時30分～ 予約制
糖尿病・代謝内科		木村 真理 (第4週除く)	木村 真理	木村 真理	木村 真理	伊藤 祐一	
緩和ケア内科		松波 馨士	松波 馨士	松波 馨士	松波 馨士	松波 馨士	※新患は要予約
感染症内科		山根 一和	山根 一和	※山根 一和		山根 一和	※水曜日トラベルクリニック・予防接種 事前予約のみ
腎臓内科				江川 雅博			
神経内科						高橋正太郎	
健診		福木 昌治	酒井 浩光	山根 一和	唐下 泰一	酒井 浩光／ (木村 真理)	事前予約のみ ※乳がん・子宮がん検診を除く
小児科	午前	林原 博	佐々木佳裕	坪内 祥子	林原 博	佐々木佳裕	
	午後	佐々木佳裕	坪内 祥子		坪内 祥子	坪内 祥子	【診療時間】15時～17時
	専門外来		佐々木佳裕 【アレルギー】	交替医 【乳児検診】 【予防接種】	【特殊検査】	林原 博 【アレルギー】 【腎・膠原病】	【診療時間】午後～ ※詳細な時間はお問い合わせ ください
消化器・一般外科		奈賀 卓司	杉谷 篤	久光 和則	谷口健次郎	山本 修	
	専門外来	杉谷 篤		杉谷 篤	杉谷 篤	杉谷 篤	腎移植・脾移植
	専門外来			ストーマ			第1.3週のみ 予約制 【診療時間】13時～16時
胸部・血管外科		鈴木 喜雅	鈴木 喜雅	鈴木 喜雅		鈴木 喜雅	
	専門外来	リンパ浮腫	リンパ浮腫	リンパ浮腫	リンパ浮腫	リンパ浮腫 フットケア	予約制 ※リンパ浮腫の新患は火・金曜日のみ
整形外科		南崎 剛	遠藤 宏治	大槻 亮二	南崎 剛	吉川 尚秀	
		遠藤 宏治	吉川 尚秀		大槻 亮二		
	専門外来	南崎 剛	遠藤 宏治		南崎 剛		骨軟部腫瘍
	専門外来		吉川 尚秀		大槻 亮二		火曜日:リウマチ 木曜日:関節
泌尿器科		高橋 千寛		眞砂 俊彦	高橋 千寛	眞砂 俊彦	
放射線科			杉原 修司	杉原 修司	杉原 修司	杉原 修司	
	専門外来		内田 伸恵				放射線治療(完全予約制)
歯科		中本 紀道	中本 紀道	中本 紀道		※	※金曜日は要相談
耳鼻咽喉科		山本 祐子		山本 祐子		山本 祐子	
眼科			佐々木慎一				
婦人科						交替医	7月～12月のみ月・金

時間 (初診受付)8時30分～11時 (再診受付)8時30分～11時 健康診断受付/毎週火・水・金 予約制

診療情報提供書: FAXによる紹介状の送信先

地域医療連携室直通FAX 0859-37-3931



国立病院機構 米子医療センター

〒683-0006 鳥取県米子市車尾4丁目17番1号
TEL.0859-33-7111代 FAX.0859-34-1580代